

啓蒙の俊英たちと18世紀スコットランド

T・C・スマウト (富田 理恵 訳)

[訳者解説]

本稿は、1997年9月に、日本学術振興会の招きで来日した、英国セント・アンドルーズ大学のT・C・スマウト教授(スコットランド社会史、環境史専攻)の講演原稿を翻訳したものである。原題を、“Eighteenth Century Scotland: The Culture of an Achieving Society”とする本講演は、京都大学、広島大学で9月24日、29日に行われた。18世紀スコットランドは、アダム・スミスをはじめとする啓蒙の俊英たちを輩出した。本講演は、彼らの大胆な発想を育んだ文化的背景を、18世紀スコットランドに探った内容である。文化的業績と時代精神、社会とのあり方との関係を考えるうえでも、示唆的な講演といえよう。

I はじめに

偉大な哲学者や政治家、令名高い将軍や詩人を育てた時代は、優れた織工や船大工も数多く生み出している。天文学を知らず、また倫理学に関心のない国(nation)で、一片の毛織物が完全に仕上げられるとは、考えられないのである。その時代が持つ精神性は、あらゆる学芸に刻印を押す。一旦深い眠りから揺り起こされた人間の精神は、熟成の時を経ると、あらゆる方面に関心を伸ばし、芸術や科学のどの分野にも改良を働きかけていくのである。

(デイヴィッド・ヒューム)

ここに引用した、ヒュームが1750年代半ばに友人に宛てた手紙の一節は、18世紀スコットランドの持つ特質を、いくつか浮かび上がらせている。

- ◆進歩の意識 人間社会は進歩し、後の時代は、過去の時代よりも優れていると想定された。また世俗的な意味で、人間社会を改良できるという考え方も生まれた。
- ◆相互に結びついているという意識 哲学者、政治家、将軍、詩人、織工、船大工、天文学者、倫理学者の業績が一斉に開花するのは、必然の結果である。
- ◆活力ある時代に生きているという歴史意識 ヒューム(彼は結局歴史家であった)は、「時代」、「時代精神」という言葉を、口にする。これらの用語は、ヘーゲルの先触れをなし、モンテスキューの「法の精神」という言葉の持つ意味の重さに匹敵した。

スコットランドにおいて、18世紀は偉大な業績に恵まれた時代であった。もっともヒュームが手紙を書いた時点からみると、その開花には時間を要した。この手紙の文言は、予言的な言辞である。1750年代半ばのスコットランドは、いまだ貧しく、近年の内乱(1745-46年のジャコバイトの反乱)の爪痕も癒えず、スコットランドで知的な熟成が起こっているとの最初の兆候が、外からもよう

やく窺われる程度であった。しかし1800年までに、あらゆる分野においてスコットランドの名声は高まり、1820年までには不動のものとなった。純粋に経済的な意味でも、当時世界で最も豊かな国(country)であるイングランドに追いつこうとしていた。工業面では、生産過程の技術様式が根本的に変化する最中であり、工場や工業都市があまねく広がっていった。1750年に後進的とみなされた農業(もっとも実際はそれほどに後進的ではなかった)も、1820年までにはヨーロッパの模範となり、若い農業学者は見方によれば全欧で最高の農法を知ろうと、諸外国からスコットランドに参集した。当時のスコットランドは、実に大きな業績を生み出した社会であった。

II スコットランド啓蒙の俊英たち

しかし、私たちがスコットランドの18世紀に目を向けるのは、その知的な業績がブリテンの枠内でみて例外的に卓越するからではなく、世界史的にみて偉大であるからである。18世紀スコットランドを舞台に多方面に活躍した巨匠たちを列挙したい。

- ◆ディヴィッド・ヒューム 英語圏における歴史上最も著名な哲学者である。
- ◆アダム・スミス 『諸国民の富』を著し、古典派経済学の父とされている。一方彼は『道徳感情論』という鋭敏な著作も遺した。それゆえスミスは、倫理哲学の分野でも経済学におけるのと同様に巨匠の地位にある。
- ◆ロバート・アダム 大建築家。同時代人によって世界中「アダム様式」になったと言われるほど、彼の内装がヨーロッパを風靡した。宮殿や市庁舎がザンクト・ペテルスブルクからボストンに至るまで、アダムの始めた様式で建てられた。
- ◆サー・ウォルタ・スコット ヒューム、スミス、アダムに続く世代の人物。スコットのヨーロッパ文学史における重要性は、モーツァルトやベートーヴェンの西欧音楽

史上の存在に等しい。比肩なき天才であり、純文学に新しいアプローチを切り開いた。

これら巨匠級の人物はさらに続く。工学のジェイムズ・ワット、詩のロバート・バーンズ、今日社会学と呼ぶ学問を手がけたアダム・ファガスン、歴史研究のウィリアム・ロバートスンと枚挙にいとまない。しかし、スコットランドの生んだ偉人の名を、単に羅列するのも無意味である。むしろ、この豊かな知的開花の特殊な一面に焦点を当てていこう。今日私たちが「スコットランド啓蒙」と呼ぶ運動は、並みはずれた冒険心や大胆さ、当時の通説からの解離、知的独創の才に満ちていた。こうした一面を紹介するために、おそらくヒューム、スミス、アダム、スコット、ワットやバーンズほどには知られていない、三人の人物をとりあげる。

- ◆ジェイムズ・ハットン 地質学者。科学史家であれば、ハットンがロバート・アダムやウォルタ・スコットほど有名でないとわかると憤慨するであろう。科学史家の認識によれば、アダム・スミスが経済学の基礎を作ったのとほぼ同じように、ハットンは地球科学の基礎を置いたからである。私が注意を喚起したいのは、地球は紀元前4004年に創造されたとするキリスト教の教え(この説は17世紀に詳細に練り上げられた)と相容れない説を、明白な形で最初に展開した人物がハットンである点である。ジェイ・グールドが深遠な時間("deep time")と呼ぶ地質学の時間は、数百万年から数十億年の単位に及ぶ。ハットンは、こうした地質学の時間感覚を示したのである。彼は、古い岩石が風化によって碎かれこれが堆積して新しい岩石が生成されるのを観察して、岩石の循環理論を展開した。その結果、キリスト教の伝統との矛盾を生じた。地球史は変化、不整合、噴火、堆積、侵食が聖書には示されていない長大なスケールで起きてきた歴史であった。エディ

ンバラ周辺の海岸や丘陵に行くと、ハットンが自分の理論の証拠を求めた由緒ある場所を尋ねることができる。今や彼の洞察が通説となっており、ハットン以前のヨーロッパ人が、地球の古さを2000世代の歳月と想定していたと考えると驚かざるを得ない。ハットンは天地創造について全く異なる単位の時間を想定したのである。

- ◆ジョン・ミラー 民法学者、社会学者である。社会科学の歴史を専攻する学者が、ジョン・ミラーは巨匠に数えられていないと聞けば、反発するであろう。ジョン・ミラーは、ファガスンとともに、社会学の基礎を築いた人物と見なされている。カール・マルクスは、ミラーの著書『身分格差の起源』(*The Origin of the Distinction of Ranks*)を読み、そこに示された階級と富と権力との関係をどう認識するかについて、大いに刺激を受けた。しかし私が注目したいのは、ミラーによるジェンダーと権力の関係の分析である。ミラーがいち早く言及したジェンダーをめぐる問題が、本格的に論じられるのは、マルクスの死後100年を経たことである。ミラーの著書の第1章は、家族の中の力関係を扱い、古代と近代の家族、ヨーロッパ社会及び非ヨーロッパ社会の家族の例が並んでおり、息をつかせない。また、ミラーはスコットランド啓蒙の知識人(literati)の中で、最も政治的に急進的で、フランス革命の最初の段階に共感を示した。ミラーはアダム・スミスの教えを受け、彼自身は、のちのモスクワ大学の初代法学教授デスニツキ(Desnitsky)と同大学初代行政学教授トレティヤコフ(Tretiyakov)を育てている。

- ◆ジェームズ・バーネット モンボド卿 判事であり哲学者であるモンボド卿が、三人目の人物である。彼は、既に述べた二人の人物に匹敵する業績があるとはいえない。しかし、彼は知的大胆さに富み自分の説の真偽を測る機会がなかったとしても、当時考えようもなかったことを考えた人物であ

る。モンボド卿の一番有名な説は、人間は猿(特にオランウータンと彼は考えた)を祖先とするという見解である。同時代人は嘲笑したものの、ダーウィンに先立つ明察である。彼はあらゆる方面でエキセントリックである。ヌーディストと菜食主義者の旗を最初に掲げたのもモンボド卿である。さらに彼は、人類は消滅した方が、神の創造である自然にとって有益なのだと述べた。この観察の正しさは、200年後明らかになっているように見える。

ハットン、ミラー、モンボドの思想の一面に焦点を当てたのは、大胆で伝統と解離したものの考え方は、ヒュームやスミスのような著名人に限らず、スコットランド啓蒙主義の文化に共通に見られる姿である、と強調したかったからである。

次のテーマとして、知的大胆さがなぜ十分に発揮されたのか、その歴史的なコンテキストを解明していきたい。もっとも、スコットランド啓蒙主義そのものの原因を説明することはできないし、するつもりもない。それは、シェイクスピア時代のエリザベス演劇はなぜ秀逸なのか、ベートーヴェンの時代のドイツ音楽がなぜ傑作であるのかを説明できないのと変わりない。むしろ、どのような条件の下で、この時代のスコットランドに大胆で優れた思想展開が可能になったのかをテーマとしていきたい。

III 啓蒙の宗教的文脈

最初に、宗教的なコンテキストについて考えてみたい。18世紀のブリテンにおいて、宗教問題は重要でなくなり、宗教は力を失いつつあった、と考えてはならない。立場の大きく異なる二人の歴史家ジョナサン・クラークとリング・コリーの双方ともに、宗教がアイデンティティを定義する際に、また忠誠心の対象として、18世紀に宗教がどれほど重きをなしていたのかに、思い至らせてくれた。た

とえ、18世紀スコットランドにおいて宗教戦争は過去のものであったとしても、ジャコバイトはたいていカトリックか主教派であり、ハノーヴァー王朝の支持者は長老主義者であった。したがって1715年と1745年のジャコバイトの反乱は、底流に宗教問題が横たわっていた。さらに主流派のスコットランド長老主義教会内部での「聖職推挙権をめぐる」論争は、1790年以前のスコットランドにおいて、反乱に次ぐ重要な「政治的」事件で広範な人々を巻き込んだ。大学においても、教授職を得るには正統神学の信奉者であることが、少なくとも建前として求められた。ヒュームが、この基準のため、彼に相当するエディンバラ大学教授の椅子を逃したのは、よく知られた話である。教会訓練についていえば、かつては、悔い改めが宣告された罪人を説教の間中椅子の上に立たせた。この古い慣習は以前ほど一般的でなくなったものの、続いていた地域も多かった。

しかし、18世紀のスコットランド教会は啓蒙主義の大胆な思想を禁じなかったばかりではなく、多くの指導的な教会人がスコットランド啓蒙を担ったのである。その代表的人物として第一に挙げられるのは、歴史家のウィリアム・ロバートスンである。彼はエディンバラ大学学長で、スコットランドの教会総会議長を務め、教会内の支配的な党派、穏健派のリーダーであった。次に挙げたいのは、社会学者で哲学者のアダム・ファガスンである。ファガスンは、ブリテン軍のブラック・ウォッチ連隊に付属する従軍牧師を務めていた。他にも幾人かの名が挙がる。ダンズの牧師で卓越した農業学者のアダム・ディクスンもその一人で、著書『農業論』(*Treatise of Agriculture*) (1762年)は質の高い農業を営むための千ページに及ぶガイドである。確かに、ディクスンの思想、またロバートスン、ファガスンの思想は、ヒューム、スミス、ハットンやミラーに比べると知的冒険にやや後れをとると言えるかもしれない。しかし、牧師ロバート・ウォレスにその評言は当てはまらない。

彼の両性関係をめぐる試論は、契約結婚と同意による離婚を提唱している。この本は出版されなかった。明らかに、書き手が聖職にある者だからという理由である。しかしおそらくこの原稿は彼の同僚には知られていたが、ウォレスのキャリアの障害にはならず、彼は教会総会議長も全うした。

したがって次に問題となるのは、教会、少なくともその支配的な党派である穏健派が、なぜ、キリスト教の伝統に対する啓蒙主義の挑戦のはらむ危険に対抗しなかったのか、という点である。ローマ教皇庁がガリレオを弾圧したように、なぜスコットランド教会は、ハットンを弾圧しなかったのか。少なくともこの当時のフランスのカトリック教会は、ヴォルテールの著作を禁書とした。なぜスコットランド教会はそのような措置をとらなかったのか。実際、1695年という比較的近年にも、キリストの神性を明白に否定したエディンバラ大学の学生が処刑されている。この裁判に、この学生の所属する大学の学長は、長老主義教会の指導的な立場にいたにもかかわらず、教会は裁判に介入し学生を守ることをしなかった。

上記の問の答えはいくつか考えられるが、要約すれば、次のようにいえよう。第一に、社会の中で教会の占める立場は、以前ほど支配的でなくなったという点、また、二番目の理由として、教会外の出来事によって教会内部も変わってきたという点である。

◆教会は衰退してはいなかったが、社会の中で教会の占める立場は、以前ほど支配的でなくなった。

社会の中に、宗教や政治に関係づけられない話ができる場が生まれしてきた。その嚆矢は、ディヴィッド・スティヴンソンが指摘するように、17世紀に現れてきたフリーメイスンである。錬金術、科学、工芸、社交がユニークな形で混ざりあったフリーメイスンが組織されたのは、17世紀のスコットランドであった。この組織は、秘密の誓いを行う。しかしさら

に注目すべきは、教会の党派や政治信条、親族関係が、社会のあらゆる人々を含む組織の運営を妨げないようにするという誓いである。フリーメイスンは、18世紀にも重要な存在であり続けたし、ますます海外に広がって行った。スコットランドのロッジ(Lodge)から直接海外支部が作られることも多かった。このようなフリーメイスンの組織をまねて、類似の「政治、宗教の不介入」の原則を持ちながら、さまざまに異なる目的の組織が数多く生まれてきた。これがジョージ王朝時代のクラブや協会(Society)である。エディンバラにはこのようなクラブが多く存在し、ヒュームは友人たちと対等な関係で交歓した。聖職者、ウィリアム・ロバートソンもその一人であった。

18世紀のクラブについて重要な点は、クラブが(フリーメイスンを別とすれば)前例のない社会組織の創始であったことである。すなわち、クラブ、あるいは協会に入ると、(当日の晩のためだけに)選ばれた主宰者と、次にもし重要なクラブであれば他の責任者も決まり、残りの成員は同格という新たなヒエラルヒーに従うことになる。晚餐、意見交換、討論、娯楽、スポーツ(この時期に最初のゴルフクラブが設立されている)のなど多様な目的のクラブがあった。注目したいのは、エディンバラ王立協会(The Royal Society of Edinburgh)とライヴァルのスコットランド尚古協会(The Society of the Antiquaries of Scotland)である。この二つの協会は、ロンドン王立協会(The Royal Society of London)、またはフランスのアカデミー(Academie)を模倣して設立されたものの、スコットランドにおける知的な討論の中心的な舞台となった。最も著名なのは、1754年にヒュームと友人たちが設立した、セレクト・ソサエティ(Select Society)である。ジェントリや貴族がこの会員になろうと先を争った。彼らは、しかし議論に加わるよりも、議論を拝聴していたようである。ヒュームはいう。「この会の存在は国の(national)関心事と

なった。老若貴賤を問わず、また聖俗賢愚にかかわらず、世の中のあらゆる人々が私たちの会のメンバーになろうと志している。あたかも「ブリテン議会の」議員に立候補するかのように、私たちはいつも候補者から強く懇願される。」

しかし公表された会の目的は、控えめで幅広いものとなっていた。自己改良と国の(national)改良とを合わせた目的が掲げられている。「修練によって、論証と雄弁の力を改良し、自由な討論によって、国(country)の福祉を増進する最も効果的な方法を発見する」という目的であった。

クラブが、ヒューム、スミス、モンボドらの登場する知的な劇場とすれば、牧師と平信徒、貴族と知識人、法律家、商人、レルドと教授が相互に称えあう場でもあった。しかしその場を主宰したのは知識人であって教会や国家ではない。伝統と慣習が背景に退き、思索と改良が前面に立つことが可能に見えた。

◆教会は衰退してはいなかったが、教会外の出来事によって教会内部も変わってきた。

より正確に言えば、実現しなかった二つの事柄によって変わったといえるだろう。

* (a) : 17世紀において、カトリック、プロテスタントの双方ともに、戦いの神が自らに勝利を与えると確信したにもかかわらず、神はどちらの期待にも応えなかった。双方戦ったが決着はつかず、ヨーロッパに新旧両教の鉄のカーテンが降りてしまった。この分断は永続した。

* (b) : 世の終末は来なかった。千年王国の預言が17世紀の世界観を大きく支配した。その内容は次のようである。たとえばスコットランドの契約派は、まずイングランド人を長老主義の教会統治に改宗させることができれば、次にヨーロッパに拡大しつつにはローマに進軍して反キリストを打倒し、イエスの再臨を招来して、この世のすべての終わりの時に至らしめると、考えていた。この予見が成就しなかった時、キリスト教

徒は自らの宗教を再定義せねばならなかった。その結果、宗教はより個人的なものとなされるようになり政治的な色彩を薄めた。宗教は、いまだ政治の舞台で重要な役割を演じたが、政治の舞台で熱烈な教会の指導者が王や貴族に指図する状況は考えられなくなった。エリートの間では、宗教的な熱狂はたいそう危険であるとの見方が支配的となった。ちょうど、1950年代にブリテンやアメリカで共産主義は一般民衆への危険な惑わしであるといわれた。同じようなニュアンスから1740年代の民衆の宗教的覚醒の時期にも、宗教的熱狂はエリートから危険視されたのである。

スコットランドの教会指導者は、主に社会の上層の出身であった点を思い起こしたい。地主、法律家、商人と聖職者は、スコットランドの支配エリートを形成していた。牧師は少なくとも都市において、十分な俸給が与えられていた。さらに1712年の聖職推挙権法は、社会的に下層の出身の牧師が増加するのを押し止める働きをした。なぜならこの法律によって、教区の地主は、(必要ならば)会衆の意志に反して牧師を指名できるようになったからである。その結果、スコットランド教会の牧師は、宗教的熱狂への嫌悪も含めて、目的意識と偏見とを地主と共有したのは、社会学的に見て当然の結果である。そうした牧師たちは、宗教をめぐる状況が再び大きく変化した19世紀に、対立者から偽善者か信仰の弱い者のようにいわれた。しかしそれは正しくない。彼らは神にある中庸の徳を信念としていたのである。

この節の最後に、スコットランド教会は国の内外の知的な動向に決して無縁でなかった点を付言したい。16世紀のスコットランド教会に影響を与えたのは、主にドイツとスイスであったので、その厳格で誇り高いカルヴァン主義のもとに、スコットランドの契約派が形成された。一方18世紀の教会に影響を与えたのは、ネーデルランドとイングランドであったため、教会はより寛大な性格を帯びたのである。そこで次に、18世紀の諸外国から

スコットランドの文化への影響について考えていきたい。

IV スコットランドと西欧諸国

18世紀のスコットランドの重要で際立った特徴は、国外の知的世界に目が開かれていた点である。1755年の最初の人口調査によれば、人口は125万人にすぎなかった。ヨーロッパの北西端に位置するスコットランドは、パリ、ローマ、アムステルダム、ロンドンなどの知的世界の中心地からは、僻遠の地のように見える。また、1707年にスコットランド議会は、イングランド議会と合同した。独自の立法府を喪失したスコットランドは、存在感を欠いた一地方に切り下げられ、ロンドンからの統治を甘受するかに思われた。しかし、事態はもっと複雑であった。外からの影響は、イングランド、フランス、ネーデルランドから及んだ。これらを順に言及していきたい。

1. イングランド

上記の内容と一見矛盾するが、イングランドの影響が重要であることも確かである。1707年の合同のゆえに、まず第一に考察したい。政治的、経済的、文化的側面から考えていく。

政治的影響

政治的には、イングランドからの影響は圧倒的であった。議会の合同といっても、スコットランドに割り当てられたのは、上院の206議席中の6議席、下院の568議席中の45議席にすぎない。したがってスコットランドの選出議員は、ウェストミンスタの議会に存在感を示すことはできなかった。アーガイル公やヘンリ・ダンダスのようなスコットランドの”マネージャー”が、当時の政府に都合の良いように、スコットランド選出議員を組織しコントロールした。マネージャーは、スコットランド議員をおとなしくする役割を担ったのである。一方、イングランド人がスコットランドから立候補することはなかった。したがっ

て、少なくとも選挙区の抱える公式の政治課題は、スコットランド人の手中にあった。しかしスコットランドは、たとえば北イングランドのヨークシャやランカシャと同じ立場に置かれ、独自の政治行動をとる余地はなかった。

経済的影響

たとえ議会の合同の政治的意味合いは重大であったとしても、合同のもたらした経済効果について歴史家の見解は一致しない。18世紀前半のスコットランド経済は、概して不振であった。合同によって繁栄が訪れるという期待は、成就しなかったのである。一方この18世紀前半の不振は、合同に由来するというよりも17世紀に原因があった。もっとも、[合同に]不満を持つジャコバイトはこの見方に賛同しなかったが。1740年以降スコットランドは、イングランドに牛を、イングランドとアメリカに麻を輸出し、またアメリカからタバコを輸入し再輸出することを基盤に、次第に繁栄していった。これら輸出入の市場は、合同条約により有利な条件で与えられたのである以上、時期は遅れたものの、合同は経済的に好影響をもたらしたと考えられる。1760年代後半からの綿工業の発達と農業の近代化は、合同の脈絡から起こってきた。しかしスコットランド人自身による企業活動とエネルギーがなければ、成功しなかったといえよう。したがって合同は、18世紀スコットランドの経済的な成功の必要条件であったが、十分条件ではなかった、といわれてきた。これは一つの公平な見識かもしれない。とはいえ、長期的な視点に立てば、スコットランドがもし独立を維持したとして、(独立が18世紀のヨーロッパ政治の文脈の中で可能なら、という前提なのだが) たとえばベルギーやデンマークのように独自に近代工業国家として発展する道もあった、と考えられよう。

文化的影響

イングランドがスコットランドに及ぼした文化的影響を測るのは、困難であるがおもしろいテーマである。その前に次の二つの点を

認識して置きたい。合同条約のもと、スコットランドはイングランドとは異なる、ナショナルな教会と法制度と学校、大学の教育制度を維持した。したがって、スコットランド独自の制度が全廃された場合を想像して比較すれば、イングランドの影響は、実際には限定された範囲にとどまり、独自の制度は、イングランドに呑み込まれてスコットランド人がアイデンティティを喪失するのを防いだ。これが最初のポイントである。次に、イングランドの思想がスコットランドで取り上げられたのは、合同によるのでない点を強調したい。イングランドの思想のうち、本來說得力があり有効で魅力的な考え方は、当時の政局にかかわらず国境を越えて広がった。18世紀の英仏戦争にもかかわらず、イングランドびいきとして最も著名なのは、フランス人ヴォルテールなのである。

政治的な脈絡に関係なく文化や思想の影響が及んだ例としては、スコットランド啓蒙主義に重要な貢献をなしたフランシス・ベーコン、ジョン・ロック、アイザック・ニュートンの思想が挙げられる。特にニュートンの影響は大きい。スコットランド啓蒙主義の中では、ニュートンによって論証された物理法則にはほぼ対応する社会の法則が、探究され始めたのである。しかし上記のイングランドの諸思想は、国境を越えた学問世界の一部であり、全ヨーロッパの知的世界の共有財産となっていた。事実ニュートンの思想は、合同以前よりケンブリッジ大学やオクスフォード大学より先に、スコットランドの大学で教授されていたのである。

これらに知名度は劣るが、18世紀のスコットランドの大学における神学教育に影響を与えたのは、アングリカンの神学、特にティロットスン(Tillotson) やスティリングフリート(Stillingfleet) に代表される広教主義の神学者の影響である。広教主義は、デカルトの哲学と当時の自然科学の理解と矛盾しない形で、千年王国論と宗教的熱狂が過ぎ去った時代に、教会がどうあるべきかを直視しようと

したからである。広教主義が、イングランドの思想という理由から、あるいは合同の結果として摂取されたのではない。

一方スコットランド人は、かぶ、[芝生、まぐさ用の] ライグラスを栽培収穫する知識から産業革命に直結する織機の導入に至るまで、農業技術、工業技術、方法に関するあらゆる新しい考え方をイングランドから自由にとり入れた。こうした技術面に関しては、合同によって短期間での導入が可能になったといえよう。たとえば、スコットランド地主階級出身の議員が、ロンドンに向かう道すがらノーフォークの政治家と知り合い、その領地に招かれて新技術に触れると、早速それを模倣することもあった。また、北イングランドにおいて[水力紡績機を使ったランカシャーの] 綿工場で有名となったりチャード・アークライトには、ランカシャーに紡績糸を取り引きするスコットランドの知己や商売上のパートナーがいた点から、アークライト自身が早速スコットランドの新工場設立に協力したと推定できる。とにかく、かぶも水力紡績機も他のヨーロッパ諸国にいずれ入っていったのと同様に、遅かれ早かれスコットランドに導入されたのは、間違いない。

以上を要約すれば、このようにいえよう。18世紀におけるイングランドからスコットランドへの文化的な影響は重要であったが、必須とまではいえなかったし、逆の流れもあった。実際スコットランドからイングランドへの影響も大きい。イングランドの思想界へのヒューム、スミス、さらにイングランドの建築様式へのロバート・アダムの影響と、イングランドの技術開発については、ジェイムズ・ワットがマシュー・ボルトンと組んで成功した例とがある。文化の流れは一方通行でなかった。

2. フランス

「古き敵」イングランドに対するフランスとスコットランドとの「古き同盟」は、18世紀には遙かな昔語りとなった。新たに合同したプロテスタントのブリテンとたびたび戦火

を交えたカトリック社会 [フランス] は、スコットランドに大きな影響を与え続けた国とは想定しにくいかもしれない。とはいえフランスが、完全に陰の薄い存在になってしまったのでもない。一つには、ジャコバイトはハノーヴァ朝の継承や議会の合同に反対しており、フランスは彼らの格好の亡命先となった。またスコットランド人は18世紀にも、フランスの傭兵として軍役についた。スコットランド傭兵の伝統は、数世紀前から続いていたのである。さらに、パリにある亡命者のコミュニティや、スコッティッシュ・カソリック・コレッジは、宗派にかかわらずスコットランドからの訪問者を歓迎した。コレッジで最も著名な教師、イニス神父は、スコットランド史研究の革新をもたらした。従来のスコットランド史においては、ジョージ・ブキャナンその他の作家による根拠の薄弱な神話が広く流布していた。イニス神父は、フランスの史料批判の手法を用いて、こうした神話にメスを入れ、歴史を、意図的に書かれた物語から科学へと変換させるのに、最も大きな功績を挙げた。ヒューム、ロバートソン、ギボンらは、全面的にイニス神父の貢献の上に存立しているといえよう。

また一般的にみても、18世紀にフランス文化は最も高く評価され、説得性に富んでいたもので、スコットランド人も魅力を感じたといえる。ヴォルテール、ルソー、モンテスキュー、ダランベールらの思想家の哲学と概念 (Pre-occupation) は、ヒュームやスミス、他多数の思想家にとって関心の焦点となっていたのは明らかである。ヒュームとスミスはフランスの思想家との哲学論争に直接参加した。ヒュームは(一時的であれ) ルソーの友人であったし、スミスはジャーナル誌上の論争において、ルソーの好敵手であった。マイケル・イグナティエフは、この論争を18世紀における最も意義深い知的討論であったとみなしている。さらにヒュームとルソーについては、次のような逸話がある。ヒュームはパリでルソーを説得し着座させ、スコットランド人の

画家アラン・ラムジにルソーの肖像画を描かせた。しかし何とルソーがその絵を好まなかったもので、友情は破綻してしまった。

スコットランド人とイングランドの知的な交流の例として、スコットランド人で日記作家、伝記作家のジェイムズ・ボズウェルとイングランドの知識人サミュエル・ジョンソンの親交が例に挙がる。しかし、スコットランドの哲学者がフランスの哲学者と直接に結んだ交流の深さは、イングランドの場合とは比べものにならない。こうしたフランスとの活発な交流のため、当時のスコットランドの教養人は、教育を受けた現代人よりも、はるかに流暢なフランス語をに話したといえそうである。

3. ネーデルランド

スコットランド、イングランド関係が18世紀に緊密になった点に、異議を唱える人はいない。また、スコットランドとフランスの啓蒙思想の間の連関も、驚くには当たらないであろう。ただし1660年から1740年にかけてのスコットランドとネーデルランド活発な文化交流は、意外と知られていない。この交流は、スコットランド啓蒙主義とスコットランドの文化一般に大きく貢献したものの、あまり認識されてこなかった。したがって、私はネーデルランドとの関係にいくらか時間を割いていきたい。

スコットランドーネーデルランド関係は中世後期に発する。ただし両国関係が知的交流と交易の面で重きをなすのは、17世紀である。1660年までにネーデルランドの対スコットランド貿易の中心地は、ロッテルダム（市内にあるスコットランド教会の陪餐者は千人を数えた。）とフェーレで、ここには100年以上の間スコットランドの指定取引所があった。一方、ユトレヒト、ライデン大学をはじめとするネーデルランドの諸大学は、知的交流の中心となった。もちろんスコットランドにも、優れた大学は揃っていた。すなわちエディンバラ、グラスゴー、セント・アンドルーズ、の各大学、アバディーンに二つの大学があっ

た。しかしこれらの大学は（聖職者の養成以外）専門職の養成には不十分で、中世の時代からスコットランド人は、あらゆるヨーロッパの大学に籍を置いて最終学位を習得した。行き先はパリ大学や他のフランスの大学、ドイツのケルン大学、イタリアのパドヴァ大学、ポルトガルのコインブラ大学、そしてネーデルランドの大学に向かった。ケンブリッジ、オクスフォードには滅多に留学しなかった。そのうち、17世紀までにネーデルランドの大学が留学先として最も人気が高まっていた。ネーデルランドが故国と同じ新教でしかもカルヴァン主義の国である点に親は安心したからであり、また両国間の定期的な交易のため、容易に連絡が取れたからである。というのも、スコットランドの仲買人は、ロッテルダムにおいて、ネーデルランドへ輸出入をするスコットランド商人の利益を守る役目を担っていた。この仲買人は、銀行家として、またライデンやユトレヒトにいる学生の相談役としても活動したのである。仲買人の一人、アンドルー・ラッセルが1665年から1695年に残した書類を見ると、学生が抱えた問題とラッセルの援助に関する手紙が多くを占めていた。

ネーデルランドの大学は、神学、医学、法学の三つの分野で18世紀のスコットランドの文化に影響を与えた。順にみていきたい。

神学

スコットランドとネーデルランドの人々は16世紀以来カルヴァン主義の中心教説といえる予定説に大きく関心を寄せてきた。厳格な予定説を説いたネーデルランドの神学者に、フランキスクス・ゴマルスがいる。ゴマルスに反対したのが、デルフト出身の偉大な人文主義者、フゴ・グロティウスであった。両者が生きている間にネーデルランドでの論争に勝利を収めたのは、ゴマルスであり、彼の説はスコットランドでも優勢であった。たとえば、ロッテルダムのスコットランド教会の会衆は、「神は、墮落した人類の大多数から、決まった数の失われ墮落した罪人を選び出し永遠の命を受け継がせた」という見解に強制的

に署名させられた。しかし17世紀末からスコットランドの神学者の間で尊重されるようになってきたのは、グロティウスの幅広い考え方であった。この受容が18世紀への寛容へと道を開いた。たとえば1724年に、グラスゴー大学の道徳哲学の教授（ガーシオン・カーマイケル）は、グロティウスの論集を編集した。その後任のフランシス・ハチスンは、キリスト教の真理についてのグロティウスの論文をテーマに、特別授業を組んだ。その授業では、たとえ神が存在しなくとも、理性の法は有効であり続けると述べるに至った。ハチスンは、アダム・スミスを教えている。18世紀のスコットランドの神学生は、たとえば、スコットランド宗教改革の生みの親である、ジョン・ノックスやアンドルー・メルヴィルの著作よりも、グロティウスやイングランドの神学者の著作を読むよう指示を受ける傾向にあった。

医学

スコットランド人の学生は、17-18世紀のスコットランドにある大学で少なくとも神学の学位を取得することができた。しかし、早くもブリテンで最初の医学部が1726年にエディンバラ大学で設立される以前には、医学の学位を取得できなかった。したがってスコットランド人の医師は、海外で学んだ。たとえばイタリアのパドヴァ大学、フランスのアンジェール大学、ルーアン大学が留学先に挙げられるが、なかでもライデン大学で教育を受けた医師が多かった。ヘルマン・ブールハーフェが、ライデン大学で1701年から1738年まで指導的な教授であった。彼の下に学んだスコットランド人学生は教授の性格と影響力に鮮やかな印象を持っていた。すなわちブールハーフェは、きわめて知的に優れていたのみでなく、とても暖い人となりであった。たとえば彼は19才のペニクックのジョン・クラークという若者と一緒に座り、パナマ地峡、ダリエンでのスコットランド人による植民活動を扱った小さなオペレッタを書いた。つまり、教授が脚本を書き学生が作曲した。エディンバラの新たな薬草園を管理するかつての彼

の弟子には、種の袋を送って、「種をいくつか送ります。満足していただけたらと願います。」と添え書きした。別の学生は兄にこう書き送った。「私は今まで10年間勉強してきた以上の事柄をここ10か月で学びました。…もし私が医学について何か知っているとするれば、それはすべて一人のネーデルランドの教授に負っています。…私はブールハーフェ氏の二冊の本の注釈をしたら4つ折本で6冊となりました。」と。アレグザンダ・モンローとその同僚によって1726年に、エディンバラ大学の医学部がようやく設立された。設立当初の6人の教授全員と2人の学外講師は、みな1718年から1720年の間に入学しブールハーフェの教えを受けた。ネーデルランドから移植されたエディンバラ大学の医学部は、成功したといえる。エディンバラ大学の医学部とこれに倣ったグラスゴーの医学教育機関がその後の40年にスコットランドの科学の発展に果たした役割を見る場合、これらの本家であったライデン大学の功績について認識を新たにすべきである。ライデンからスコットランドに移植された医学教育は、18世紀半ばまでに軌道に乗り、スコットランド人の学生は留学の必要がなくなったばかりか、エディンバラ大学は、ヨーロッパやアメリカからも留学生を引き寄せるまでになった。

法律

医学と科学の発達にとって、ネーデルランドは確かに重要な存在であった。けれどもその重要性は、法学研究の分野においてもひけを取らない。1575年から1800年の間に1460人以上の学生がライデン大学に入学した。その半数が法律を学んでいる。1650年から1750年までは、法学生が大多数であった。1675年から1725年までの50年間でも軽く半数を超えた。ユトレヒト、フローニンゲン、フラネカーなどの他のネーデルランドの大学にもかなりの数の学生が留学した。1660年から1725年までの間に上級弁護士団(the Faculty of Advocates) (スコットランドにおける法律家の上級団体) に入ることを許可された法律家

の5分の2 (275人) がネーデルランドで法学を学んできた。そこでグロティウスや、ペトルス・グッドライナス、ヨハンネス・フートのような当時の指導的な法理論家の著作を読んできたのである。

1750年以前の上級弁護士団の法律家の半数近くが、ネーデルランドで最終学位を取得したという事実がなぜ重要かといえば、啓蒙の世紀に上級弁護士は、スコットランド社会に枢要な地位を得ていたからである。法律家はエディンバラの社会のバックボーンであった。彼らは地主の家系の出身であることが多く、その法知識の実践は、土地をめぐる争いや財産の移転といった、地主にとって必要な法的処理に集中した。また法律家自身が、土地を購入し「改良家」として新農法を实践したケースも多い。一方、当時の知識階級 (intellectuals) であった法律家は、地主エリートと他の知識人たち (literati) とをつなぐ役割も果たした。たとえば、ケイムズ卿、モンボド卿、ヘイルズ卿のように、法律家でありながら、作家、哲学者、歴史家として活躍した人物もいたのである。スコットランド啓蒙の中心的な人物の多数が、自己形成する青年期に、ネーデルランドの大規模でリベラルな大学で勉強したという経歴は、確かに重要な意味を持つといえよう。

V おわりに

さて今までの内容をまとめると、どのようになれるだろうか。論点を整理してみよう。第一に、18世紀のスコットランドの文化の特質として重要なのは、知的な大胆さである。この特質を持つのは、巨匠に限らない。たとえ知名度が低くとも、自由な発想を持った人々がいた。

第二に、スコットランド教会の中の変化と、自由な討論のできる [クラブなどの] 新しい社会空間の創造によって、大胆な発想が可能となった。

第三に、スコットランドは、狭量で内向的

な社会ではなかった。イングランド、フランス、ネーデルランドの影響が積極的にもたらされ、社会生活、知的生活に貢献した。すなわちスコットランドはコスモポリタンな社会であった。

しかし最後に次の問いに答えを探っていきたい。大胆さ、自由、国際性 (cosmopolitanism) が、どの程度スコットランド社会に浸透したのか、という課題である。はたして、大学や、エディンバラ、その他の主要都市のクラブや協会、法律家や地主とそれに連なる人々のサークルといった枠を越えて広がった傾向なのだろうか。エリートの啓蒙があったように、民衆の啓蒙主義運動があったのだろうか。

これは非常に大きな問題であるものの、スコットランド史家は、この問題にまだ全面的、体系的には答えていない。私はここで、いくつかの考察を示したい。

スコットランドの社会階層を下っていくほど、教会内のリベラルな新傾向に対する拒絶反応は強くなる。知識階級の間でも、すべてが [エディンバラ大学] 学長ウィリアム・ロバートソンの穏健派に同調していたのではない。おそらく穏健派の最大の敵は、ペイズリの牧師ジョン・ウィザースプーンであった。彼は、プリンストン大学の初代学長としてアメリカ植民地にわたり、やがてアメリカ独立宣言の署名者の一人となった。ただし一般的に言えば、穏健派に対する反感は貧しい職人や小規模な借地農のような、さほど富裕でない人々に強かった。反穏健派の人々は、いわゆる分離派の諸教会 (the Seceded Churches) を形成し、文字通りスコットランド教会から離れていった。ところでこの教会分離派の人々は、厳格な予定説や魔術の存在を強く信じるなど、一層古いタイプのカルヴァン主義を信奉したのである。

社会的に下層の子供達の教育は、初歩的な段階に留まっていた。さらに女子教育は、たとえ階層が高くなっても、同階層の男の子が受けた教育より、劣っていた。もちろん18世

紀ヨーロッパ世界に教育上の階級間の平等やジェンダー間の平等は望むべくもないとはいえ、スコットランド啓蒙はとりわけ男性のみの運動であった。スコットランドには、[イングランドにみられた] メアリ・シェリー、ジェーン・オースティン、ドロシ・ワズワース、メアリ・ゴドウィンのような女流作家群は誕生しなかった。

スコットランドの歴史家の間に、民衆が受けることのできた教育の性格と質についての論争が最近起きている。これについて次のように私は見る。ローランドの農村では、ヨーロッパのたいていの地域においてよりも、わずかに高い割合の人々を書くことができた。そしてほとんどの男女が字を読むことはできた。しかし、スコットランドの教区学校での教育が、イングランドや北欧の学校に比べ抜群に成果を挙げたという事実はない。

上記の事実は、社会一般に広がりをもつ民衆の啓蒙主義運動が存在すると期待する向きには、おそらく否定的な材料である。他方、18世紀スコットランドには、エリートの文化が部分的に下の階層に浸透した様相も見られる。

都市のグラマー・スクールは、選ばれた生徒に対して高水準の体系的な教育を施しうる場合も多かった。アダム・スミスが学んだカーコーディのハイスクールがその例である。またイングランド全般と比較しても、スコットランドのほうがより低い社会階層の子どもにまで教育が浸透した。スミス自身、父は税関の役人という庶民の出身であった。多くのグラマー・スクールとアカデミーとして知られる新種の都市の学校は、今までと同様に、将来性のある子どもを学校教師か牧師に育てようとした。その一方で、ミドリングランク出身の男子生徒には、商業の時代にふさわしい実用的な教育を試みていた。

1790年のペイズリの織工の場合のように、働く人々からなる最も富裕なコミュニティには、クラブや協会を媒介とする魅力的な文化が開花した。政治論議をテーマとするクラブ

もあれば、ゴルフ、植物研究に焦点を当てたクラブもあり、エディンバラやグラスゴウのクラブ文化の流行を彷彿とさせる。こうした面を判断すれば、スコットランド啓蒙主義は、社会的な下層へと浸透しているように見える。同様に、農業労働者や石工の回想録（例外的に幸運な者のみが回想録を書いた点は思い起こしたいのだが）には、本を買ってそれを畑や小さくなっていく蠟燭の灯のもとで読んだという記述が出てくる。その書物はおそらくヒュームの『対話』(Discourse) やスミスの『諸国民の富』ではないだろうが、ロバート・バーンズの詩か、南太平洋の探険を綴ったアンスン海軍大将の『航海』(Voyages) だったかもしれない。社会の下積みの人でも、読み書きの能力を備えつつあった。読み書きという新しい窓によって世界が開けたであろう。その窓から、時には民主主義思想や平等思想、あるいは民衆的なエネルギーを持つ宗教的熱狂が入ってきた。このような影響は、地主や牧師たちの歓迎するところではなかった。知的な意味において大胆な飛躍であった啓蒙主義は、この段階ではエリートを越えた地平があったといえよう。

上記の環境から、18世紀後半から19世紀にかけての注目すべきスコットランド人が現れてきた。一人は、トマス・テルフォードである。彼は羊飼いの息子でありながら、おそらくブリテンの生んだ最も偉大な土木技師である。もう一人は、石工であり小農でもあった父を持つトマス・カーライルである。彼の19世紀初頭における社会批判によれば、啓蒙主義は、唯物論的な思考と自由放任主義の信奉において、いまだ不徹底であるとされた。しかし精神運動は、その中にやがて運動の前提まで変えてしまうような批判精神を内在させてこそ、真の偉大な精神運動といえるのではないだろうか。また、カーライルのこうした批判こそ、ヒュームのいう、改良があらゆる芸術や科学に及んだ証拠といえるであろう。